

『新古今私抄』の実態について

近藤美奈子

一、はじめに

『新古今和歌集』の最初の注釈書は、東常縁が二〇〇首を注した『新古今集聞書』である。その後、細川幽齋がこの書を基に増補等を行って成ったのが増補本『新古今和歌集聞書』(以下、「増補本」と呼ぶ)で、六一六首に注が施されている⁽¹⁾。

『新古今私抄』(以下、「本書」と呼ぶ)は、増補本を基に全歌に注を付けようとしたものの未完成に終わった注釈書である。現存する伝本は、内閣文庫蔵本(函架番号・二〇〇一〇一五)のみの孤本である。尚、『和歌大辞典』(後藤重郎氏執筆)に「新古今和歌抄とも」と挙げられている別称は、内閣文庫の目録(「簿冊情報」)における本書の書名を指しているものと思われ、実際には本書の外題は「新古今私抄」であって、「新古今和歌抄」の名称は見当たらない。本書の翻刻には、全文を翻刻した『未刊国文古註釈大系』⁽³⁾と増補本の歌注部分を削除して新たに追加された歌注のみを翻刻した『新古今集古注集成 近世旧注編 1』⁽⁴⁾とがある。現在のところ、後者の岸田依子氏による解題が本書についての最も詳しい研究といえようが、解題という性質上、細かな点には触れられていないので、まだ解明すべき余地が残されていると思われる。そこで本稿では、本書についての調査報告をするともに幾つかの問題点に

ついて考えてみたい。

二、書誌

判型は大本(美濃本)、袋綴一〇冊の写本で、二巻ずつを一冊に収める。朽葉色厚手表紙で、凡そ縦二七・八糎×横一九・〇糎。第一冊目は表紙が他冊よりも黒ずんでいて題簽がなく、表紙左肩に打付書で「新古今私抄 一」とある。第二冊目以降には表紙左肩に書名と冊数を記した題簽が貼付してある。内題はない。本文料紙は楮紙。墨付きは、第一冊六四枚、第二冊八四枚、第三冊八四枚、第四冊四九枚、第五冊四三枚、第六冊五一枚、第七冊六二枚、第八冊八四枚、第九冊八四枚、第十冊四三枚。遊紙は各冊、前後に各一枚。一面一〇行(細字注は例外)。和歌一行書。和歌より詞書は二字、注釈本文は三字下げて書く。印記は「和歌講談所」「浅草文庫」「内閣文庫」等。奥書には「右之一冊亡父亜相光廣真跡無疑者也 藤原資忠在判」とある。本書には『新古今和歌集』の仮名序と詞書や左注の付いた全歌が収載され、該当する歌には増補本注や増補本以外の別注が付されているが、別注には標準の大きさの字のものや細字のものがある。注釈のない歌の後は二行分が空白になっている。その他に頭注・傍注・付箋注・別紙注なども付されている。所収歌数は一九七八首である。『新編国歌大観』を基準にす

ると、二二二・二三三・三三五・一七七二番(何れも増補本非所収歌)が欠けているが、三首の異本歌(*一七八四番と一七八五番との間に、(切り出し歌)「大空に契る思ひの年もへぬ月日もつけよ行すゑの空ノ太神宮歌合に・太上天皇」、*一八〇一番と一八〇二番との間に、一九九二番歌「水茎の中に残れる滝のをと」としもさむき秋の声哉ノ題しらず・大中臣能宣朝臣」、*一九一三番と一九一四番との間に、一九九四番歌「住吉と思ひし宿は荒にけり神のしるしを待とせしまにノ奉幣使に住吉に参りてむかしすみけるとまりのあれたりけるを讀侍ける・津守有基」を有する。

第一冊目に乱丁があり、第一六丁と第一七丁との間に本来あるはずの二丁が第四三・四四丁の場所にずれている。歌番号で示すと、二六番の半ばから二七番全部と二八番の大部分が一・二番の詞書と作者名との間に挟まっている。『未刊国文古註釈大系』では乱丁には言及がなく、本来の歌順となっている。

三、所収注釈書の書写について

本書は、先ず『新古今和歌集』を写しながら同時に増補本注と一部の別注を写すという作業を行い、その後、注釈のない歌の後ろ二行分の空白に細字で別注を書き入れるという段階をふんで成ったと思われる。細字注は、短文のも長文のも空白部にきちんと収まるように書かれているので、その場でいきなり注されたのではなく、既に一書と成っていたものから書き写されたものと考えられる。したがって、本書は増補本や別注など既成の注釈書を基にした諸注集成を目指していたのだらうと推察

される。同一路線の幽斎の増補本を引き継ごうとしたものであるといえよう。

但し、その書写作业は総体的に注意を払って行われたとは思われないものである。例えば、全六一六歌注の収載を意図していたはずの増補本注に関しては、一八六一番歌の注「賀茂の御哥也 雲わけてのほらんとは本望にかへり給はむといふ歌なり」が漏れている。

増補本注は詞書や左注を掲載していないが、本書はそれらを掲載する方針である。そこで、増補本の注釈中に詞書が示されている場合、重複をさけるために本書は増補本注から詞書部分を省いて書写しているのであるが徹底しておらず、詞書部分が省かれていないままの注も数箇所ある。十分な注意力をもって書写作业が行われたとは思われないところがある。

さて、一八六一番歌の注が収載漏れになったのも、詞書部分の省略と同様の作業を行おうとした結果である。同歌には左注「加茂の御哥となむ」が付いている。ところが、前掲の如く増補本の注釈中にも左注を示した一文がある。そこで、増補本注から左注部分を省いて書写しようとした際に、左注の位置が注釈本文の位置と紛らわしいので、左注を注釈本文と勘違いして残りの注釈本文を写し漏らしてしまい、結局一八六一番注が収載漏れということになったのではなからうか。

増補本の書写に関して言えば、本文の誤脱や本歌・引歌の脱落など小さな過誤が全体的に見られることを付言しておきたい。

ところで、本書には前記以外にも大きな書き誤りや注目すべき特徴が見られるので、歌順に従って列記する。

一七番は増補本注だが、注釈本文が途中で終わっているのを

付箋を貼って補つてある。

一五六番（別注）は歌注全体が付箋に書かれて、一六〇番歌の上に貼られている。

一二四番に、前歌一二三番の注釈本文が重複して書かれ、棒線でミセケチにされている。

二五七番「窓近いきさゝむら竹風吹は秋におとろく夏の夜の夢」（増補本注）の注釈本文が、直前の二五六番「窓近き竹の葉すさひ風の音にいとゝみしかきうたゝねの夢」（増補本非所収歌）の方に記されている。

二八九番の注釈本文に続いて、同じ高さで次歌二九〇番の注釈本文全部と二八九番の詞書・作者名・歌が書かれているが、詞書は「ヒ」のミセケチ、他は棒線のミセケチになっている。

三二七番から三二五番（増補本非所収歌）には注釈本文は記されていないが、その注釈が書かれた別紙一枚（一一・〇糶×四三・〇糶）が二つ折りにされて第四六丁の袋の間に挟まれている。

三四三番は増補本注であるにもかかわらず細字注である。

五七七番（増補本注）の注釈本文の後に同じ高さで、五八〇番（増補本注では五七七番の次に位置する）の完全な歌注が続いている。本来の位置にも五八〇番は重複して書かれているが、こちらの注釈本文には少々脱落と位置の異同がある。

六〇二番「紅葉ゝををのか染たる色そかしよそけにをける今朝の霜哉」（増補本非所収歌）は歌のみが書かれているが、五九二番「紅葉はを何おしみけむ木の間よりもりくる月はこよひこそみれ」（増補本非所収歌）の方に六〇二番歌に相当する注釈本文が細字で記されている。

六七〇番（増補本注）の注釈本文の後に同じ高さで、六七一番（増補本注）の歌注が続いている。六七一番の本来の位置には詞書・作者名・歌のみが書かれ、注釈本文はない。

一〇二七番「我恋も今は色にや出なまし軒のしのふも紅葉しにけり」にある細字注は、一〇三〇番「我恋は松を時雨の染かねてまくすか原に風さはくなり」（増補本注）についての別注である。

一二一五番にある細字注は、実際は増補本注である一二一四番歌の別注に相当する。

一二九四番（増補本注）・一九二〇番（同）は、歌が万葉仮名で書かれている。

一九一五番は増補本注に細字の別注が付属している。

『未刊国文古註釈大系』では、のミセケチを省き、は別紙注であるのにもかかわらず他の付箋注と区別せずに「附箋」の注記を付け、については正して、はそのままの形で翻刻してある。は注（三）に記したように翻刻に漏れている。

さて、は追加された別紙の注であるが、これについては後述したい。とは増補本注を書写する際に書き漏らした本文を付箋や細字で補つたものである。は『新古今和歌集』書写時に書き漏らした歌に気付いて、それを補う際に別注も追加したのだと考えられる。は同じ初句の歌を取り違えたものの、は隣の歌と位置を間違えたものである。これらを見ると、『新古今和歌集』や増補本・別注を書き写していく作業が注意を払って丁寧に行われたのではないといえよう。また、付箋や細字注などがそのままにされているという形態から

すると、本書は草稿的なものであろう。

四、別注について

本書に収載されている増補本注以外の別注には、『新古今和歌集』と同時に書写されたと思われるものと後から空白二行分に追記された細字注とがあり、何れも既に一書として出来上がっていた注釈書を書き写したものと考えられることは前述の通りである。

別注は三三五首に付けられているが、そのうち細字で追記された注は少なくとも二二八首⁵である。少なくともこの場合は、二行分の空白部に追記された注が二行以内の短文である場合、特に細字で記す必要がないので追記されたものか否か見分け難いからである。したがって、追記された注の実数は二二八首を超えるものと思われる。別注の三分の二が追記されたものである。一旦増補本注などを収載した後に、諸注集成の試みが熱意をもって続けられていたといえよう。煩瑣ではあるが、『未刊国文古註釈大系』には細字注の区別がないので、細字注の付けられている歌番号を左に掲げておきたい。

283、	188、	30、
284、	190、	32、
307、	191、	45、
331、	193、	56、
343、	195、	71、
344、	196、	72、
361、	200、	87、
372、	208、	131、
392、	211、	135、
470、	215、	162、
495、	219、	164、
502、	245、	165、
521、	247、	166、
527、	276、	175、

1784	1653	1544	1471	1404	1271	1180	1105	1026	925	863	784	536
1800	1655	1546	1472	1405	1275	1181	1107	1029	926	869	794	549
1810	1675	1557	1480	1411	1280	1190	1110	1030	946	870	798	553
1865	1678	1560	1481	1412	1290	1193	1112	1033	947	883	804	555
1866	1686	1562	1482	1414	1292	1195	1118	1036	976	894	807	580
1868	1692	1575	1489	1415	1314	1205	1129	1042	995	898	808	584
1869	1693	1576	1506	1426	1351	1215	1131	1044	997	899	812	602
1870	1699	1586	1511	1439	1354	1216	1148	1055	998	905	815	739
1885	1701	1596	1513	1443	1371	1239	1153	1063	1000	909	822	750
1896	1707	1604	1514	1448	1379	1242	1159	1075	1002	911	818	760
1905	1722	1606	1515	1451	1381	1251	1166	1079	1005	912	833	761
1908	1732	1629	1523	1452	1383	1258	1167	1084	1010	915	840	764
1915	1733	1648	1532	1454	1389	1262	1170	1087	1012	917	852	773
1919	1756	1649	1535	1462	1400	1267	1178	1090	1019	923	858	779

1921、1924、1931、1976

ところで、別注の出典についてはまだ解明が進んでいないが、一書は、心敬の説を聞書した猪苗代兼載の増補による『新古今抜書抄』であることが判明した。

『新古今抜書抄』には一一六首の歌注が収められているが、そのうちの九八首は増補本にもある歌である。左に『新古今抜書抄』に収載されている歌の番号を掲げる（で困った番号は増補本と重ならない歌）。

一九、二七、**三〇**、四一、六一、六三、**八七**、九七、九九、一一一、一二六、一五四、一五五、一六九、**一七五**、二〇一、二二四、二二七、二二八、**二二九**、**二三三**、**二四七**、二五一、二六二、二八九、三〇〇、**三六一**、**三六二**、**三六三**、**三六四**、**三六八**、**三七五**、**三七六**、**三七八**、**三八七**、**三九二**、**三九三**、**三九八**、**四一八**、**四四一**、**四七〇**、**四九一**、**四九五**、**五〇二**、**五二二**、**五二七**、**五二〇**、**五二七**、**五三〇**、**五五九**、**五六一**、**五八〇**、**五八七**、**五九八**、**六一四**、**六五四**、**六六三**、**六八一**、**六九七**、**七〇四**、**七一九**、**七三三**、**八〇三**、**八八三**、**九〇〇**、**九二七**、**九三三**、**九三五**、**九六九**、**九八〇**、**九八九**、**一〇二九**、**一〇三八**、**一〇三九**、**一〇八一**、**一〇九五**、**一一〇一**、**一一四**、**一一四二**、**一一九六**、**一二九九**、**一二九四**、**一三二二**、**一三二四**、**一三二五**、**一三二六**、**一三二七**、**一三二八**、**一三三〇**、**一三三三**、**一三三四**、**一三三六**、**一三三七**、**一三三八**、**一三七四**、**一四七〇**、**一五二一**、**一五二五**、**一五四七**、**一五六〇**、**一五六二**、**一五六四**、**一五六五**、**一六〇一**、**一六一八**、**一六五〇**、**一六六六**、**一六六七**、**一七二八**、**一七二九**、**一七四〇**、**一七五七**、**一七八二**、**一八七五**、**一九〇二**、

本書では、追記の細字注の形態で、増補本と重ならない歌に限って『新古今抜書抄』を全て収載している。例外は二例で、

増補本注の歌であるのに、頭注に『新古今抜書抄』を重ねて記している六三番と『新古今抜書抄』に注があるにもかかわらず別注を採用し頭注も記す二四七番である。また、一一九番は『新古今抜書抄』を採用しているが、別注も頭書してある。これらについて考えてみたい。

【新古今私抄】 六三番

霜まよふ空にしほれし雁がねの帰るつばさに春雨ぞ降る

雁がねの春秋往來の辛勞をあはれみたる歌なり

【頭注】 鳥の中にも雁は生得辛勞する物也 遠境をしよきて北の

国の露霜にぬれ 又春といへば細雨にしほれて哀ふかき

体也【新古今抜書抄】と同文）

『新古今抜書抄』が頭書されているのは、本文注の増補本注を補うものとして相応しい注であったからではなからうか。

【新古今私抄】 二四七番

夕暮はいづれの雲の名残とて花橋に風の吹らん

せいかんの説には夾山神女が古事にて、朝には雲となると云たるが、夕暮はいづれの雲の名残ぞと云る也、雲をばきえたる人の形見などにする物なれば、たちばなと雲とにむかし思ひ出したるまでなり

【頭注】 雲は風をながすもの也

【新古今抜書抄】

このうたのせつあまた有といへども、橋は昔を恋、ふりにし人のかたみ、そでの香などいひならはしたれば、黄昏のおりふし此花にかぜの吹たるは、雲と成にし故人の玉しゐぞと、心を付てよみ給ふ哥也とぞ。かんせいふかき哥にや。かやうのうたなどを大概にみては、何の心も曲あるべから

ずと申せり。

本書に採られた別注は、巫山の雲雨に関する説を斥け、妥当な解釈を述べている。頭注は、花橘に風が吹くということと雲との関係を合理的に説明するものとして付けられたと思われる。この歌についてだけ例外的に『新古今拔書抄』が採用されなかったのは、風が吹いたのを「雲と成にし故人の玉しゐぞ」と極端な解釈をしたせいではなからうか。

【新古今私抄】 二一九番

をざゝ吹しづのまろやのかりのとを明方に鳴郭公哉

真に山家の感深き躰也、定めて構たる戸はやすくあくる物なれば、夏の夜のあけやすき暁がたに鳴と云心也

頭注

をざゝは山にかぎりて有もの也、五文字は山家をもたす也

【新古今拔書抄】

実に山家のかんふかき躰也。さだめてかまへたる戸は、やすくあくる物なれば、夏の夜の明やすき暁方になくといふことろ也。

頭注は、本文注（『新古今拔書抄』）の「山家の感深き躰」の詳しい説明として付けられたものと思われる。頭注は、本文注に言及のなかった「をざゝ」についての説明を加え、さらに「五文字は山家をもたす」と述べて、「をざゝ吹」という五文字が題「山家暁郭公といへる心を」の「山家」の意を支える言葉であることを指摘している。なお、歌の「をざゝ吹」は正しくは「小笹葺く」である。

さて、増補本注のない歌については原則的に『新古今拔書抄』注を採用していることから、本書が『新古今拔書抄』を重要視

していることが知られる。しかし、注釈作業の基盤として無条件に増補本に依拠しているのとは違い、機械的に『新古今拔書抄』を採用するのではなく、のように注釈内容を吟味した上で採用していない例もある。また、では『新古今拔書抄』を補強するために頭注を付けている。このような点から、細字注を付す作業は、第三章の のように書写する場所を間違えている例もあるとはいえ、案外丁寧に行われているのではないかと思われる。また、頭注がどのようにして付けられたかはまだ不明であるが、の頭注が『新古今拔書抄』の注であることから、少なくとも頭注の一部には既成の注釈書が用いられていることが確認できた。

五、頭注・傍注・付箋注・別紙注

前述のように、本書には頭注・傍注・付箋注・別紙注なども見られるので、その数と分布を増補本注の歌・別注の歌・注釈のない歌に分類して示したい。

* 所収歌数：一九七八首

* 増補本注歌数：六一五首（頭注：一六首、付箋注：五首、傍注：二首、別注が接続：四首）

* 別注（増補本注以外）歌数：三三五首（頭注：一〇首）

* 注釈のない歌数：一〇二八首（頭注：一一首、付箋：一三首、傍注：一首、頭注・付箋注の数字は、両方を有する一首が重複）

次に、頭注・傍注・付箋注・別紙注の付されている歌注について、その番号と注釈の略号とを掲げて所在を示したい。

《略号》（増）：増補本注（別）：別注（無）：注釈なし

【頭注】六三(増)、一三七(無)、一五一(増)、一八二(増)、一九七(別)、二〇三(無)、二〇六(無)、二一九(別)、二四〇(無)、二四一(無)、二四二(無)、二四三(無)、二四四(別)、二四六(無)、二四七(別)、二四九(無)、二五一(増)、二五二(増)、二五三(無)、二八八(増)、二九〇(増)、二九一(無)、二九三(増)、二九五(増)、三三五(無・付箋アリ)、五二二(別)、五四四(増)、五六九(無)、七〇七(増)、七二二(無)、七二七(無)、七五二(無)、七五三(別)、七七七(無)、九二七(別)、一〇〇四(無)、一一一五(無)、一一三九(別)、一三九七(増)、一四八七(無)、一六〇六(別)、一七二二(増)、一七九六(無)、一八二二(増)、一八四四(無)、一八五四(無)、一八六五(別)、一八七九(別)、一九三一(増)、一九四〇(増)、一九四八(増)

【付箋注】七三六(無)、一三三二(増：本歌の指摘のみ)、一六二五(無)、一八六三(無)、一八六七(増)、一九一六(無)、一九六八(増)

【傍注】一二二五(無・詞書の下)、二二三三(増・作者名の下)、二七四(増・歌と注釈との行間)、一六七二(増・注釈本文の右横)、一九四七(増・詞書の下)

【別紙注】三二七(無)、三二八(無)、三二九(増)、三三〇(無)、三三一(無)、三三二(無)、三三三(無)、三三四(無)、三三五(無・頭注アリ)

【付・別注が増補本注の末尾に接続しているもの】
九七二(+漢文一文)、一一二四(+一文)、一二二四(+細字注…一二二五の位置にある)、一九一五(+細字注)

頭注・傍注・付箋注・別紙注などは、その形態からして追記されたものに違いないが、注の形態と内容とは関連性があるのであるうか。頭注の内容を見ると、地名・枕詞・作者名・助詞の意味用法の説明、語釈、あるいは歌の作意や技法、歌の大意や解釈など多岐にわたっている。そのうち詞書や作者名に関する語釈や説明が二十数例と多い。傍注は詞書と作者名に関するものだけである。頭注や傍注というように、書物に直接書き付ける形態の注に詞書や作者名に関わる内容が多いというのは当然の結果といえようか。付箋注や別紙注は、語釈、詞書・作者・地名の説明、序詞の指摘などもあるが、半数以上が歌の解釈に関わるものである。これらを見ると、それぞれ異なる形態の注に共通して同種類の内容が記されている。したがって、これら形態の異なる注を特に区別して扱う必要はないと思われるが、形態と内容とはある程度の傾向性が認められることが指摘できよう。

それでは視点を变えて、増補本注や別注を有する歌、注釈のない歌それぞれに付けられた注についてみることにしたい。

増補本注に付けられた注は、詞書や作者に関するもの四例以外には、増補本注を補足するものや増補本注が触れていない事柄について述べるものが多い。その他、異説を述べるもの(二九〇・二九五番)、注釈内容が難解なので平易に一首の意を述べたもの(一九三一番)、増補本注には「哥は心はよくきこえたり」としか書かれていないので一首の意を述べたもの(一九六八番)など、増補本注に対して批判的傾向の注が目される。

別注に付けられた注は全て頭注の形態のものである。詞書に関する六例の他は語釈や補足などの内容であるが、歌全体の解

釈に関わるものはない。付箋注がないのは、無条件に収載されている増補本注とは違い、別注が採用される際には一応その内容が吟味されているということを反映しているのであるうか。

注釈をもたない歌には、詞書に関する傍注が一例の他、頭注・付箋注・別紙注が付されている。さて、この頭注・付箋注・別紙注の存在こそ注目すべきものである。増補本や別紙注の場合、本文部分には既に注釈が記されているので、そこに注を追記することはできない。そこで、追記が頭注や付箋といった形態をとることになったと考えられる。しかし、注釈を持たない歌の場合は二行分の空白部があるので、そこに注を記すことが可能である。それにもかかわらず、頭注や付箋などの形態で注が付けられているのは何故であろうか。詞書や作者名等いわば歌の外面に關するものではなく、歌の解釈に關する注について見ることにはしたい。

【二四〇番】

帰りこぬ昔を今と思ひねの夢の枕に匂ふ立花

頭注 むかしは帰りこぬものなれとも心におもへはむかしもかへりくる也 匂ふ立花はむかしを夢にみるを云 是は夢のさめたるを云

【二四二番】

さ月やみみしかき夜半のうたゝねに花橋の袖に涼しき

頭注 風をいはぬ所か作意也 風をよくもたしよみたり

【三一七番】

雲間より星合の空を見渡せばしつ心なき天の川波

別紙注 心のないを云 星も川波もしつ心ないとかねて見るへし

【三二四番】

七夕のあふせたえせぬ天河いかなる秋かわたり初けん

別紙注 一説に此哥は七夕のちきり初はあひそめたることのしらぬ心をやめりと也 人のちきりはかわりやすきにうらやみたる心也

【一六二五番】

ことしけき世をのかれにしみ山へに嵐の風も心してふけ

付箋注 世のうき事をのかれてきたるに風も心せよ 又こゝもかなしくては何としてすまんするそ也

【一九一六番】

なをたのめしめちか原のさしも草我世中にあらん限は

付箋注 しめちか原 しもふさ也 さしも草の名所也 哥の名所也 哥の心はもくさは物の薬にて人をたすくる理あれば其如くたのめたすけんと云り

頭注・別紙注・付箋注から各二例を掲げたが、何れも注として妥当なものだと思われる。これらの注が本文の空白部に書き入れられていてもおかしくないと思われる。しかし、本文の空白部はそのままの状態になっていて、頭注や付箋注の形態で注が記されているのである。これをどのように考えればよいのであろうか。第三章では、本文の空白部に細字注が書き入れられていること、その細字注は既成の注釈書に拠ると考えられることを述べた。つまり、空白部は然るべき既成の注釈を書き入れるために使われることになっているのである。したがって、空白部がそのまま置かれていたということは、これらの頭注・付箋注・別紙注が既成の注釈書を書き記したものであることを示しているのではなからうか。そうだとすれば、これらの注は本書注釈者自身によるものだと考えてよいのではないかと思わ

れる。但し、自注ではあるが、自説そのものというわけではない。というのは、前掲の三二四番注に「一説に……」とある例や第四章で取り上げた六三番のように他人の説を引用していることが明らかなものがあるからである。頭注・傍注・付箋注・別紙注は、自説も他人の説も取り混ぜて本書注釈者が自分で注を付けた部分であると考えられよう。

六、書写者（＝注釈者）

本書第一〇冊目には「右之一冊亡父亞相光廣真蹟無疑者也藤原資忠在判」と書かれた奥書がある。資忠は烏丸光広の次男で、本書が光広の真筆すなわち著作であると記してある。

烏丸光広は、天正七（一五七九）年に生まれ、寛永一五（一六三八）年七月一三日に六〇歳で没している。妻は細川幽斎の息女である。光広は『和歌文学辞典』⁸⁾に

後陽成・後水尾二代にわたって、中院通勝・三条西実条らと共に宮廷文化人グループの代表的な存在であった。多芸に秀で、和歌はもとより、故実・漢詩文・連歌・狂歌・俳諧・書道・茶道などに広く通じていた。とくに、和歌を細川幽斎に学び、幽斎直系の二条派歌人として有名であった。光広が著した『耳底記』は、幽斎の口述・談話を筆記したもので、光広の歌学思想やその性格を知る好資料である。

と記されているように当代きつての文化人で、家集・歌学書・紀行文・随筆などの著作も多い。幽斎の増補本を基にして全歌注釈を試みたのが本書であるが、幽斎との師弟関係から見ても、岸田依子氏の「烏丸光広は本書の注釈者像にきわめて妥当な人

物と考えられよう」という見解が首肯されるところである。

さて、本書は、『新古今和歌集』を写しながら並行して増補本注及び一部の別注を書写するという作業で出来たものを土台として、他の注釈書からの説や頭注・付箋注などを書き加えるという方法で作られているので、それぞれの筆跡について字の大きさや墨の濃さ、丁寧などが異なっている。このように複雑な筆跡について、岸田依子氏は「本書の書字を見ると、奥書以外はすべて同一人の書である」と述べておられるが、稿者も同様の印象を受けた。氏はさらに「烏丸光広筆の他の文献の筆跡と照合して、真筆と見て差し支えないかと思われる」とも述べておられるが、稿者には筆跡鑑定は困難で正直なところ判断しがたい。それに、以下に述べるように光広の書写を疑わせる所が出てきたので考えてみたい。

奥書について一つの疑問が湧いてきたのである。奥書の筆跡は前述の如く、本書の本文とは別筆のように思われる。さて、「資忠在判」が問題である。「資忠在判」の「在判」の意味するところは、原本には資忠の花押が書かれていたということである。すなわち、本書が原本ではなく、写しであることを示しているものである。とすれば、奥書が主張するところの、本書が光広の真筆であるということが疑わしくなってくるのである。つまり、本書は光広筆本ではなく、その写しであるということになる。しかし、既述のように、本書には細字注や頭注・傍注・付箋注・別紙注など様々な形態の書き入れがあり、筆跡の丁寧さや墨色の違いなども見て取れ、到底写しとは思われなない。やはり本書は原本で、同一人物が注釈作業を重ねて書いたものように思われるのである。付言すると、本書が原本であ

るといふことは、書写者が同時に注釈者でもあることを意味する。さて、本書が写しではなく原本だとすれば、今度は奥書自体が捏造されたものではないかとの疑いが生じる。或いは、この奥書は烏丸家の関係者が資忠に仮託して、本書が光広自筆本であることを強調するために付けたものなのであろうか。

ところで、本書には、和歌的素養のある人が書写したとするには不自然に思われる書写上の誤りが幾つか見られる。次に挙げる例は何れも増補本注が引かれていて箇所なので、増補本に照らして明白に誤写と判断できるものである。

六二番歌「帰る雁今はの心有明に月と花との名こそ惜けれ」の注釈に「雁か立田に教訓したる歌也」とある。「雁か立田」の「立田」は「音」を誤読したものであるうが、和歌に通じた者がするとは思われないような誤りである。

七四八番歌の注釈中の「席歌」も「序歌」の誤りである。但し、一〇〇二番歌の注釈では正しく「序」と書かれているので、単なる書き誤りかもしれない。

七五七番歌「末の露もとの雫や世中のをくれさきたつためし成らん」の注釈本文「人のあはれにたとへたり」の傍線部は増補本を見ると「命」となっている。本書は「命」を「哀」に誤読して、それを平仮名で「あはれ」と書いたものであるう。

一〇二八番歌「いそのかみふるの神杉ふりぬれと色には出す露も時雨も」の注釈には「題をこはしてたる歌也」とあるが、傍線部は増補本では「まはしたる」である。「まはす」とは、例えば「俊頼髓脳」に「題の文字は三文字四文字五文字あるを限らず、よむべき文字、必ずしもよまざる文字、まはして心をよむべき文字、さへてあらはによむべき文字あることを、よ

く心得べきなり。心をまはしてよむべき文字をあらはによみたるもわるし」と書かれている和歌用語である。ここも和歌の素養に欠けるが故の誤読のように思われる。

本書の書写態度には丁寧とは言いがたいところがあり、書き誤りや書き落としなどが散見されることは既述したが、ここに挙げた書写例を見ると、書写者に和歌的素養があれば回避できた書き誤りのように思われる。このような書き誤りを当代随一の和歌人である光広がするものであるうか。疑問である。書写者は光広以外の人物なのであろうか。また、前述のように、本書は写しではなく原本である可能性が高い。今までに述べた事にこの条件を加味すると、書写時には和歌的素養が十分ではなかった者が一人で注釈作業を繰り返し行って成ったものが本書であるということになるうか。

七、おわりに

以上、本書『新古今私抄』についての調査報告と考察を述べてきたが、様々な疑問点を十分に説明できたとはいえない。従来は本書の書写者（＝注釈者）は烏丸光広とされていて、稿者もそのように思っていたが、既述のように光広説に疑いが生じた。しかし、疑いは生じても、光広説を斥けるだけの確実な根拠を示すことはできなかった。筆跡の問題が最も困難な壁で、書写者に指定すべき人物が他にいないのか、厳密な筆跡鑑定によって書写者が特定されるのか、或いは同一人物による書写ではないのか等稿者には手に負えない疑問点が残ったが、今後、筆跡に頼らない別の根拠による解明を期したい。

【注】

(1) 増補本成立の経緯についての詳細は次の論考を参照されたい。

拙稿『新古今和歌集聞書』(増補本)の成立について(『甲南国文』第二九号・一九八二年)

片山享『新古今和歌集註』について(『和歌文学研究』第四八号・一九八四年)

片山享『新古今和歌集註』解説(『新古今集聞書 牧野文庫本』
・古典文庫・一九八七年)

片山享『新古今集聞書』(後抄)考(『甲南国文』第三二二号
・一九八五年)

(2) 明治書院・一九八六年。

(3) 吉沢義則編『未刊国文古註釈体系』第六卷・帝国教育
会出版部・一九三七年/清文堂出版・一九六九年)。この書で
は、本書に見られる歌注位置などの誤りを整齐して翻刻してい
る。また、一〇二七番の注釈(実際は一〇三〇番歌に相当する)

「松を人にあて時雨を我身にあて、染かぬるたひことにはうら
みくすると也時雨は晴てもふりくする物なれば其ことく人
を恨もはてすそめかねては恨くすると云心也風さはくとは恨
をたてんため也又時雨のする時は風のそふ物なれば也」、一二

一五番の注釈(実際は増補本注である一二一四番歌の別注に相
当する)「あつまちにかるてふかやとは板東にかやをかるとお
ほく云つけたれば也武蔵野などに多はみたる也(傍点部はミセ
ケチ)、一九七一番(増補本注)の注釈「衣裏宝珠の心也歌に
かくれたる義なし」が翻刻漏れである。なお、歌番号は「新編

国歌大観」に拠る。

(4) 岸田依子 翻刻・解題『新古今私抄』(『新古今集古注
集成 近世旧注編1』・笠間書院・一九九八年)。以下、岸田氏
の引用は同書に拠る。なお、同書は増補本注を除いて翻刻する
という方針であるが、八九一・九〇〇・九三〇・九四二・九四
九・九六〇・九六二・九六八・一〇三二番は誤って増補本注が
翻刻されている。また、二三三番の傍注「あらし田氏也伊勢の
神人也」、七二三番の頭注「大二条は大殿など云心也」、注(3)
に既に掲出した一〇二七番の注釈と一八一〇番の注釈「長夜の
闇を思折ふしゆふつけ鳥をきゝたるか哀れなると也」が翻刻漏
れである。

(5) 一二八首のうち、一九〇番は本行に書かれた別注に、
また、一九一五番は増補本注にそれぞれ細字注が付されている。
(6) 片山享 翻刻・解題『新古今拔書抄(松平文庫本)』(『新
古今集古注集成 中世古注編1』・笠間書院・一九九七年)
本文の引用は同書に拠る。

(7) 第四章で取り上げた六三番には既成の注釈書である『新
古今拔書抄』注が頭注に書かれているが、ここは本文注として
増補本注があるので同列には扱えないと思われる。両書は注内
容が重なっている上に、『新古今拔書抄』の方が詳しい。もし、
ここに増補本注がなかったら『新古今拔書抄』注を採用したの
ではなかるうか。『新古今拔書抄』注が捨てがたかったので頭
注として記しておいたのではないかと思われる。

(8) 有吉保編・桜楓社・一九八二年。

(9) 傍線は私に付す。以下、同じ。

(10) 『日本歌学大系 第一巻』(風間書房・一九五七年)